教科書文庫
5
810
45-1948
0130449849

中等國語 三

廣島師範學校男子部附屬中學校

(4)

文部省

50581
教科書文庫
5
810
45-1948
01304
49849

教科書文庫
5
810
45-1948
0130449849

P.T.A.

中等國語

三

文部省

広島大学図書
0130449849

(4)

中央図書館

広島大学図書
0130449849

目録

一　詩　五首……一
二　和漢朗詠……四
三　白樂天の詩……八
四　螢雪の功……十一
五　漢字の話……十五
六　墨子の說……二十一
七　莊子と列子……二十三
八　日本における漢文漢學……二十六
九　詩　五首……三十三
十　古都三景……三十七
十一　雙十節の由來……四十三
十二　孟子とその主張……四十六

一　詩　五首

開卷まず漢詩を學ぼう。第一首は農事を詠じたもの、第二首は遊學の學生に対する教訓、第三首には故郷を思う詩人の心情、第四首には遊學さきで受け取った家からの手紙の主旨をうかゞうべく、第五首はのどかな江南の春景色、いずれも平易に敍した五言の詩。後に添えた原詩を參考にしてよく味わうべきである。

農を憫む

禾(1)を鋤いて日午に当たる
汗は滴る禾下の土
たれか知らん盤中の飧
粒々みな辛苦なるを

廣島高等師範學校附屬中學校 昭和 年 月 種類

遊子吟

慈母 手中の 線
遊子 身上の 衣
行に 臨んで 密々に 縫ふ
意に 恐る 遲々として 帰らんことを
たれか 言ふ 寸草の 心
三春の 暉に 報い 得んと

（孟郊）

雜詠

客 故郷より 來たる
まさに 故郷の ことを 知るべし
來日 綺窓の 前
寒梅 花を つけしや いまだしや

（王維）

京師にて家書を得

江水 三千里
家書 十五行
行々 別語 なし
たゞ いふ 早く 郷に 還れと

（袁凱）

訪隱君を尋ぬ

水を 渡り また 水を 渡り
花を 看 また 花を 看る
春風 江上の 路
覚えず きみが 家に 到る

（高啓）

注

(1) 穀物の総称。
(2) 唐の中ごろの詩人。
(3) 親を思う子にたとえた。
(4) 三春は春三箇月、暉は光。親の恵みのあたゝかくあまねきに比した。孟春（初春）・仲春（中春）・季春（晩春）をいう。
(5) 唐の中ごろの詩人、字は東野。
(6) 唐の中ごろの詩人。画にもひいでていた藝術家。字は摩詰。

(7) 元末から明初へかけての詩人。
(8) 明のはじめの詩人。みずから青丘と号した。

○ 鋤レ禾日当レ午。汗滴禾下土。誰知盤中飧。粒々皆辛苦。
○ 慈母手中線。遊子身上衣。臨レ行密々縫。意恐遅々帰。誰言寸草心。報二得三春暉一。
○ 客自二故郷一来。應レ知二故郷事一。来日綺窓前。寒梅著レ花未。
○ 江水三千里。家書十五行。行々無二別語一。只道早還レ郷。
○ 渡レ水復渡レ水。看レ花還看レ花。春風江上路。不レ覚到二君家一。

二和漢朗詠

和漢朗詠集は、藤原公任が、わが國および漢土の詩歌文章の中から、朗誦するに足りる佳句を抜き出して編んだ書で、平安時代の紳士淑女は、時にふれて、その中の詩句を朗誦し、一種の謠物となっていた。唐人の詩句は、この書を通じて、平安時代の人々に流布し、親しまれた。後に、習字の手本としても使われたものである。

朗詠されたという本質にしたがい、今、読み方は主として旧訓にしたがった。

東岸 西岸の やなぎ 遅速 同じからず 南枝 北枝の うめ 開落 すでに 異なり
(慶滋保胤)

氣はれては 風 新柳の 髪を くしけづり 氷 消えては 浪 旧苔の ひげを 洗ふ
(都良香)

落花 ものいはずして 空しく 樹を 辞し 流水 心 なくして おのづから 池に 入る
(白居易)

年々 歳々 花 あひ似たり 歳々 年々 人 同じからず
(劉希夷)

池 すゞしくして 水に 三伏の 夏 なく 松 高くして 風に 一声の 秋 あり
(源英明)

螢火 乱れ 飛んで 秋 すでに 近く 辰星 早く 没れて 夜 はじめて 長し
(元稹)

林間に 酒を あたゝめて 紅葉を たき 石上に 詩を 題して 緑苔を 拂ふ
(白居易)

三五夜中 新月の 色 二千里外 故人の 心
(白居易)

遺愛寺の 鐘は まくらを そばだてて 聽き 香爐峰の 雪は すだれを かゝげて 看る
(白居易)

都府楼は わづかに かはらの 色を 看 観音寺は たゞ 鐘の 声を きく

六（菅原道真）

寒流 月を 帶びて 澄める こと 鏡の ごとく 夕吹 霜に 和して ときこと 刀に 似たり

（白 居易）

蝸牛角上に 何事をか 爭ふ 石火光中に この 身を 寄す

（白 居易）

泰山は 土壤を 讓らず 故に よく その 高きを 成す 河海は 細流を いとはず 故に よく その 深きを 成す

（史 記）

注

(1) 一條天皇のころの人。もとの姓は賀茂。京都の六條に池亭を構えて、みずから「池亭記」を作った。
(2) 平安時代のはじめの人。菅公の少し前に当たる。
(3) 第三課參照。
(4) 唐のはじめの詩人。
(5) 夏の土用を三分した初伏・中伏・末伏をいう。暑さの最も盛んなころ。
(6) 宇多天皇皇子齋世親王の子。
(7) 字は微之、白樂天の親友。
(8) のぼったばかりの月。
(9) 遠い所。こゝでは、白樂天のいた長安から遠く離れた元稹がいる江陵の地をさす。
(10) 匡廬（江西省九江縣の西南にある）の北の峰。遺愛寺はその北にあった。
(11) 太宰府をいう。
(12) 天智天皇のたてられた寺で太宰府にあった。
(13) 石を打ってでる光、短い人生のたとえ。
(14) 山東省泰安縣の北にある名山、五岳の一。
(15) 太古から漢の武帝までの歴史を記した書。漢の司馬遷の著。

○ 東岸西岸之柳 遲速不レ同。南枝北枝之梅 開落已異、

○ 氣霽風梳二新柳髮一。氷消浪洗二旧苔鬚一。

○ 落花不レ語空辞レ樹。流水無レ心自入レ池。

○ 年々歳々花相似。歳々年々人不レ同。

○ 池冷水無二三伏夏一。松高風有二一声秋一。

○ 螢火乱飛秋已近。辰星早沒夜初長。

○ 林間煖レ酒燒二紅葉一。石上題レ詩拂二綠苔一。

○ 三五夜中新月色。二千里外故人心。

○ 遺愛寺鐘欹レ枕聽。香爐峰雪撥レ簾看。

○ 都府楼纒看二瓦色一。観音寺只聽二鐘声一。

○ 寒流帶レ月澄如レ鏡。夕吹和レ霜利似レ刀。

○ 蝸牛角上爭二何事一。石火光中寄二此身一。

○ 泰山不レ讓二土壤一。故能成二其高一。河海不レ厭二細流一。故能成二其深一。

三 白樂天の詩

白樂天、名は居易、香山居士・醉吟先生の号がある。唐の中ごろの文人。在官中江州司馬に左遷され、廬山に草堂を築いたことがある。その詩は内外に流布し、和漢朗詠集に多く引用され、また源氏物語をはじめとして、國文学に影響した点が多い。今、その流行の原因をたずね、作品の一端をうかゞおう。

昔、一條天皇の御時、「香爐峰の雪はいかならん。」と仰せられし皇后定子に対して、清少納言が直ちにみすを高くまきあげ参らせ、同座の人々を感ぜしめしこと、枕草子に見ゆ。これ、朗詠に引かれし白樂天の

遺愛寺ノ鐘ヘ欹レ枕聽キ　香爐峰ノ雪ヘ撥レ簾看ル

の詩句に基づきし故事なり。「人々も、みなさることは知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。」と傳ふ。もつて、白樂天の詩のいかに人口に膾炙しゐたりしか、知るべきなり。

和漢朗詠集は、平安朝より鎌倉時代にかけて廣く行はれしが、その中に引かれたる句数は、唐士の作家が、多きも十余條にとゞまり、わが國の作家も、おの〳〵三四十條にすぎざるに、ひとり白樂天のみは一百四十に達す。かれの詩の、平安朝の縉紳の間に重んぜられしこと、推して知るべし。したがつて、当時の詩文中、白樂天の作品に模したるものも多く、和歌の中にも、白氏の詩句にもとづきしもの、その例に乏しからず。

そも〳〵白氏文集のわが國に流行せし理由は、唐の文化の模倣に努めし当時にありて、白詩が本國にあまねく流行しゐたりしためにほかならず。しかして、その本國に流布せし原因は、ひいてわが國に流行せし理由たり。即ち、その理由の一は、かれの詩が平易なることなり。傳へいふ、樂天の詩を作るや、まづ老婆をして解せしめ、解しえざるときは、幾たびも改め作り、解しうるにいたつてやむと。もとより事実にはあらざらんも、かれの作風の平易明暢にして、兒女もよく解するを旨としたるために作られし傳説なり。樂天晩に佛教に帰依し、経典の文句と佛教の思想と、往々にしてその詩文中に見るをうべく、これまた佛教が盛んに上下に行はれゐたる彼我両國に、白詩の流行するにいたりし一因なり。

詩をもつて作者が世人を諷諭するの具たらしむべしとは、漢士の古來の詩説なり。樂天は特にこれを力説せしのみならず、これを作品に実行せり。わが文学に著しく影響せし秦中吟十首のごとき、当時の人士の通弊を歌へり。世人富貴を逐ひ、貧賤を避く。官吏は賦税を重くして民衆の痛苦を顧みず、都人は花卉を買うて田翁の長歎を招く。管鮑二疎の跡を慕ふ者なし。わが國にも流布せし新樂府五十篇のごとき、古今の社会の裏面を諷せり。神仙を慕ひて祈禱にふけり、徴兵をいとうて臂骨を折る。詩中、縛戎人をいたみ、賣炭翁をあはれみ、貪吏をにくみ、艶色を戒めたり。

かれが社会の一面を詠じたるは杜甫の影響なるべきも、かれが生涯には杜甫の流離なく、寒に衣あり、飢に食あり、一身に奉じて余りありて、家人に及ぶ。詩風時に陶淵明に似たるあるは、故なきにあらず。

ほかに、かれの作品中、彼我の文学界に喧傳せらるるものは、長恨歌・琵琶行なり。ともに敘事の長篇にして、一は唐の玄宗と楊貴妃との韻事を敘して風情あり。一は(10)潯陽江頭に客を送つて、舟中より琵琶の雅音の漏るるを耳にし、追懐の情にたへずして作る。いづれも、文学の好材を、天禀の詩才に託す。不朽の名作たるに恥ぢざるなり。

樂天の詩の生存中にすでに遠近に流布し、雞林ならびに本邦に流傳せるは、古今の詩人中、類例少なしといふべし。傳來の作品の多きもまた及ぶものまれなり。古來有数の詩人といふべし。

注

(1) 一名白氏長慶集という。たゞ文集と題したものもある。長慶は唐の年号。枕草子に「文は文集、文選、博士の申文。」とある。文選とあいならんで、当時の文人の嗜好に投じ、作文作詩の標準となっていた。

(2) 管仲と鮑叔牙。春秋齊國の人、交友の厚かった例に引かれる。

(3) 漢の宣帝の時の疎廣と疎受、その高官を辞して故郷に引退したとき、洛陽の東門の外に見送る車馬は非常に多く、世人みなその賢を称した。

(4) 「海漫漫」の一篇をいう。

(5) 「折臂翁」の一篇、若い時、徴兵を避けてみずから大石で臂を折った老翁が、時々その傷がいたむけれど、長命を保つことができた幸を歌ったもの。

(6) 縛られて苦役に送られる蛮人。この詩は、その中に、蛮人にとらわれ、喜んで唐軍に降った辺境の一民が、許されず、他の蛮人とともに南へ送られる苦しみを述べたもの。

(7) 宦官の内職のために、正当な代價を與えられないで苦しむ生産者の一例に炭やきの老人を挙げた。

(8) 「黒潭龍」の一篇をさす。

(9) 「古冢狐」の一篇をさす。

(10) 江西省九江の一名。

四　螢雪の功

学問の道は限りなく遠く、人の一生はあまりに短い。しかもその短い一生が、必ずしも学問に都合よくばかりはできていない。だからうっかりすると、いや、よほどしっかりしないと、学問はものにならない。この課では学問に精進したあまた古人の努力の跡をたずね、その体驗から生み出された味わい深い詩文によって、悔いなき学徒の生き方を見出だそう。

車胤、字は武子といふ。学を好んでうまず。家貧にして、常には油を得ず。夏の月には練布のふくろに数十のほたるをいれて書を照らし、夜をもつて日に継いで、うみ怠らず。(1)晉の桓溫、(2)荆州にあり(3)し時に、めして從事とす。博学をもつて世に知られ、朝廷にめされて、吏部尚書となるといふ。孫康(4)は、家貧しくして学を好み、清介にしてまじはり遊ばず。冬の夜、油なし。雪に映じて書を読む。後

に御史大夫にいたると。これによつて学業に励み、その功を遂ぐるを、ほたるをあつめ、雪に映ずといふ。

（釈了意「新語園」による）

諸君のごときは春秋に富み材力に足る。もしおこたらずして日に学に進まば、なんぞ古人に及ばざるべき。しかれども、歳月はたのむにたらず、材力は多とするにたらず。たゞ孳々汲々として勉めてやまざるにありぬべし。もし悠々として日をわたり、いつたん年老い齢傾きて後、日ごろのおこたりを思ひ出でて、いかに悔ゆともなんの益かあるべき。即ち今、翁が身の上にて候。されば古詩にも、「少壮努力せずんば、老大いたづらに傷悲せん。」といひ、陶淵明も、「盛年重ねて来たらず、一日再びあしたなりがたし、時に及んでまさに勉励すべし、歳月は人を待たず。」といへば、古人もこの感懐を同じうすとぞ見えし。これらの詩句、時々吟詠して勇進の志を振るひ起すべし。また世に傳ふる朱文公の勧学の文に、

「いふなかれ、今日学ばずとも來日ありと。いふなかれ、今年学ばずとも來年ありと。日月ゆけり。歳、われと延びず。あゝ老いたり。これ、たれのあやまちぞや。」

言、簡にして意も明白なり。をりふし打ちずんじて、自ら警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは、陶侃が語なり。

「大禹は聖人なるに、寸陰を惜しめり。衆人にいたりては、まさに分陰を惜しむべし。あに佚遊荒廃、生きて時に益するなく、死して後に聞ゆるなかるべけんや。これ、みづから棄つるなり。」

といへるこそ、学者立志の法とすべけれ。

およそ人と生まれて学に志ありといふきはの、生まれて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果つるは、いと口惜しかるべきことなり。されば、諸君も、この陶侃が語をもてみづから激昂して、日夜勤勉せらるべし。たゞし、学は勇進を喜ぶといへども、また急迫なるをきらひはべり。とかく一生こゝを離れぬことにて候へば、急迫にして求むべきにあらず。たゞ怠惰を戒めて、常に聖賢の書に優遊涵泳せられば、久しうしておのづから進益あるべし。

翁、むかし加賀にありし時、士族の中に、紹鷗・利休が風流を慕つて、茶の湯を好む者あり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にてもかまをかけ、炭をおきて楽しみとしけるを、同行の人見て、「いかにすけばとて道中にてはやめよかし。」と言へば、その人言ふは、「道中の日とて一生の外にあらばこそ。これも一生の日数のうちなれば、わが茶の湯をする日にあらずといふことなし。家にあるとなんぞ異ならん。」とて、その後もやめざりき。学者の道に志すも、この人の茶の湯を好むがごとくなるべし。

もとより道はしばらくも離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ、道のあるところにあらざるはなし。然るを、急迫にして求めば、たとひ僅々としてうることありとも、皮膚の間にてやみなん。いかでかそのしゝむらをかんで滋味にあくことあるべき。いはんや急迫なれば、久しきにたへぬものぞかし。いまだ日至の時に及ばずして、やがて倦怠するにいたりなん。

（室直清「駿台雑話」による）

注

(1) 國名。春秋列國の中と、三國の次と、五代とにあるが、こゝでは三國の次の晉。
(2) 東晉のはじめの武將。明帝の時、安西將軍荊州刺史となり、征西大將軍に進み、武功によって名声があった。
(3) 地名。今の湖北省内に位する。晉代には湖南省内に移ったりしたが、桓溫が今の湖北省江陵縣の地に移した。
(4) 中央の役所の名。文官の位階任免のことを掌る。尚書はその長官。
(5) 東晉の人。
(6) 御史台という中央官廳の長官。官吏の罪を取り調べて上申することを掌る。
(7) 淨土眞宗の僧侶。京都の人。
(8) 書名。十卷。延宝九年自序。漢籍の中から教訓的逸話を選び出して、かな交り文で記したもの。今多少改削した。
(9) 無名氏「長歌行」。漢末の作と傳えられる。
(10) 「長歌行」の末の二句、原文は「少壯不二努力一。老大徒傷悲。」
(11) 晉の末の大詩人。
(12) 「雜詩十二首」の第一首の末の句。原文は「盛年不二重來一。一日難二再晨一。及レ時当二勉励一。歳月不レ待レ人。」
(13) 名は熹。南宋のはじめの大学者で、朱子学の祖。朱子・朱文公と尊ばれる。
(14) 普通、文というと散文をさすが、漢文では、古くは詩文の総称、または詩をさす。
(15) 「勿レ謂今日不レ学而有二來日一。勿レ謂今年不レ学而有二來年一。日月逝矣。歳不二我延一。嗚呼老矣。是誰之愆。」たゞこの詩は古文眞宝という俗書の前集に見えるが、朱子の全集には職っていないから、朱子の作としては疑わしい。駿台雜話の原文には、そのことが述べてあるが、煩わしいので省略した。
(16) 東晉の名將。若いとき、貧乏で、荊州刺史であったときにこの逸話を残した。この時の荊州は湖南省の地内。
(17) 原文は漢文のまゝ次のように引用しているが、こゝでは改めた。
「大禹聖人。乃惜二寸陰一。至二於衆人一。当レ惜二分陰一。豈可下佚遊荒廢。生無レ益二於時一。死無二聞二於後一。是自棄也。」
(18) ふるいたつ。
(19) 武野紹鷗。室町時代の茶人。泉州堺の人。京都で茶道香道を学び、次の利休とともに茶道を大成した。
(20) 千宗易。泉州堺の茶人。紹鷗の弟子。織田信長・豊臣秀吉に仕え、晩年、秀吉の怒りにふれて、死を賜わった。
(21) 書名。五卷。室直清（鳩巣）の随筆で、修身学藝に関する内容が多い。駿台は江戸駿河台で、鳩巣が幕府の儒官であった時に、賜わった邸宅のあった地。この文は卷五「年にはづかし」の一部分。

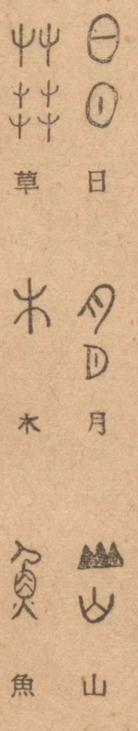
五　漢字の話

漢字はもと支那の文字であるが、わが國に傳來して長い間使われ、今ではわが國常用の文字となり、國民生活の上に非常にたいせつなものとなっている。故にわれらはまずこれに

ついて正確な知識を修めなければならない。本課は漢字の成立・使用、ならびにその構造等について述べたもので、これを理解しておけば、漢和字書の利用にも役だつ。

世界の文字を大別すると、表意文字・表音文字の二種となる。漢字は前者に属するもので、古來その構成法を称して六書とよんでいる。六書とは象形・指事・会意・形声・轉注・仮借である。

象形は物の形体に象どったもので、図画とその性質を同じくし、字形を見て直ちにその意味を知ることのできる文字である。故に日月・山川・草木・鳥獣・身体・器物等すべて形に表わしうる物の名はこれによったものが多い。



象形は製字の基本で、大部分の文字は源をこゝに発しているが、その字数はあまり多くはない。

指事は事物の性質を指示するもので、象どるべき形を持たないものは、記号でその性質を示すか、または象形文字を基本とし、これに点・画を増減して、その性質を指示するものである。

などの文字は、記号で事物の性質を示したものであり、また「木」をもととして、上に「一」を加えて本末の「末」とし、中に「一」を加えて未來の「未」とし、下に「一」を加えて根本の「本」とし、月の一画を減じ、半月にして「夕」の字としたなどは、象形文字の字画を増減したものである。

会意は既成の文字二種または二種以上をつらね、その会合によって生ずる意味をとるもので、時にはその字画を省くこともある。

林　木の並び立つもの、　炎　火の重なるもの、

これらは同体の字を連合したもの、

位　人の立つ所、　明　日月の並び照らすこと、

東　木の中に日のある方角、　解　牛の角を刀でとく、

これらは異体の字を連合したもの、

孝　老人の下に子がいてつかえる意、老の字の「匕」を省く、

勞(労)　経営して力を用いる意、營(営)の字の「呂」を省く、

義　我を美にする意、美の字の「大」を省く、

これらは異体の字を連合して、その画を省いたものである。

形声は両字を合して、一半は意を主とし、一半は声、即ち発音を主としたもの。

河　銅　右の可・同は声で、左の水・金はその意、

攻　頭　左の工・豆は声で、右の攵・頁はその意、

盈　悲　上の成・非は声で、下で皿・心はその意、

草　界、下の早・介は声で、上の艸・田はその意、
圉(囲)閣　内の韋・各は声で、外の口・門はその意、
問　輿　外の門・與(與の略)は声で、内の口・車はその意、

また「忘」は「心」の意をとり、「亡」の声をとったものであるが、また亡失の意がある。「漁」は「水」の意をとり、「魚」の声をとったものであるが、また水中の魚をとるという意がある。これらはみな形声で、会意を兼ねたものである。形声は六書の主要なもので、文字をふやす方法としては最も便利であるから、漢字の十中八九はこの法によったものである。

以上の四法によって多くの文字を構成したけれども、限りある文字で、限りない事物を表わすことは困難なので、更に轉注・仮借の二法によって、その運用を廣めた。

轉注とは、その字本來の意味を轉じて、他の似かよった意に変えて用いるものである。この中にはその意を轉ずるにしたがって、声を異にするものと、その意を轉じても、声を同じくするものとがある。

「樂」は音樂の樂であるが、音樂は人の心を樂しませるものであるから、その意を轉じて、「たのしむ」の意となし、声を「らく」と変えて用いる。「好」は女・子二字の会意で、美または善の意、善美は人の好むものであるから、その意を轉じて「このむ」の意に用い、声はもとの声に從う。

仮借は、その字本來の意味にかゝわらず、声のみを借りて、他の意に用いるもので、この中には、本字があって他の字を借りるものと、本字がなくて他の字を借りるものとがある。

「革」は皮革の革であるが、「更」の代わりに借り用いて、「あらためる」の意とするのは前の例、耳は「みゝ」の象形であるが、「のみ」の助辞に借り用いるのは後の例である。漢語の助辞は、多く仮借文字で書き表わされる。

仮借は、声音をうつすには必要なもので、木をきる音を「丁丁」とし、からすの声を「啞啞」とするの類、また外國語を音訳した「南無阿彌陀佛」「成吉思汗」の類は、みなこの法によったものである。

無数の漢字は、いずれも以上六種の方法によって成立したもので、したがって漢字は、すべて、形・音・義の三者を兼ね有している。

形とはその構造で、すべての漢字は点と線とから成る。その点・線を字画または画という。形を分けて偏・旁・冠・脚・構・垂・遶とする。字形の左部を偏、右部を旁、上部を冠、下部を脚、外部を構と称し、垂は冠に属し、遶は脚に属する。漢字はこれらの組み合わせによってできたものであるが、すべての文字がみなこの各部を備えているとは限らない。その中で、偏をもつ字が最も多く、偏の数も六十に及んでいる。

音とは、文字の読み方である。わが國で音というのは、特に、訓に対して漢土傳來の発音によるものであるが、中には、傳來に当たってわが國の人々にとって、発音しにくかったために変じたものもある。したがって当時の漢土の音をそのまゝ、傳えたものばかりではない。

漢字音には、漢音・呉音の別があり、まれには唐音(宋音)と呼ばれる音も行われる。

漢音	呉音	唐音
京	京城	東京	南京

行　品行　行列　行燈
請　請願　請來　普請

漢文が朝鮮半島を経て傳わった当時の発音によるものは呉音で、半島と交通が行われていた揚子江流域の音である。佛語および古來慣用の語は呉音を用いることが多い。

精進　供養　坊主　虚空　口授

漢音は、隋唐と直接に交通するようになってから、その都長安附近の音の傳わったもので、唐音は、宋元以來、禪僧や商人が傳えた音である。

義とは文字の意味をさす。その義にしたがってわが國で、一定の訳語として各字にあてたことばを訓という。

日　月　人　山　川　家　誠　富　動

漢土から傳わった漢字の外、わが國で作った漢字を國字という。國字は会意に属するものが多い。

榊　栃　峠　畠　辻　凧　鱈　叺　働

國字には音がないのが普通で、「働」は例外である。

わが國のかな文字は、漢字からできた一種の音字である。おゝむね平がなは漢字の草体をもととし、片かなはその省体からできたもので、例えば、「あ」「い」は「安」「以」の草体、「ウ」「エ」は「宇」「江」の省体によったものである。

墨子の説

戰國時代に儒家と並び称された学派に墨家がある。墨家の祖が墨翟である。かれは孔子の後、孟子の前に出て、兼愛非攻の説を唱えて、当時の混乱した社会を救おうとし、文字通り東奔西走の活動を行った。「墨突くろまず」ということばは、この墨子のことをいったもので、儒家と肩を並べるほどの勢力を有した時代もあった。今傳わっている墨子という本は墨家の人々の作であろう。

兼愛

墨子説いていう、仁人は天下の利を興し、天下の害を除くために事業をなすものであると。しからば、天下の利、天下の害とは何かというに、墨子はいう、今、國と國とあい攻め、家と家とあい奪い、人と人とあいそこない、君恵なく臣忠ならず、父慈ならず子孝ならず、兄弟あい和睦しないというようなのは天下の害であると。しからばこの害はどうして生ずるか。人々あい愛することから起るであろうか。墨子は説く、それはあい愛さないから生ずることである。今諸侯はひとり自分の國だけを愛することを知って、人の國を愛することを知らない。そこで平氣で一國を挙げて人の國を攻める。また家長はひとり自分の家だけを愛して、人の家を愛することを知らない。そこで一家を挙げて人の家を奪うことを平氣でやる。また個々人も、ひとりわが身だけを愛して、人の身を愛することを知ら

ない。そこで一身を挙げて人の身をそこなうことを平氣でやる。諸侯あい愛さなければ必ずあい争い、家長あい愛さなければ必ずあい奪い、人々あい愛さなければ必ずあいそこなう。君臣あい愛さなければ恵忠ならず、父子あい愛さなければ慈孝ならず、兄弟あい愛さなければ和睦しない。また、天下の人があい愛さなければ、必ず強い者は弱い者をとらえ、多数をたのむ者は少数の者をおびやかし、富める者は貧しい者を侮り、貴い者はいやしい者におごり、ずるい者は愚かな者をだます。こういうふうに、およそ世の争奪怨恨等の災禍は、みなあい愛さないということから生ずるのであるから、仁者はこのような行いを排斥するのであると。しからば、何をもってこれに代えたらよいか。墨子は説いていう、兼ねてあい愛し、こもごもあい利する法をもってこれに代えようと。しからばその方法はどうか。墨子はいう、人の國を見ること、わが國を見るごとく、人の家を見ること、わが家を見るごとく、人の身を見ること、わが身を見るごとくにする。かくすれば、諸侯はあい愛して戰争せず、家長はあい奪わず、人々あいそこなわず、君臣は恵忠、父子は慈孝、兄弟はあい和睦し、天下の人も互にあい愛して、強者も弱者をとらえず、多勢も小勢をおびやかさず、富者も貧者を侮らず、貴者も賤者におごらず、ずるい者も愚かな者をだまさない。かようにして、争奪怨恨の類が世に全く起らなくなるならば、それは全く人々あい愛するがためでなければならない。故に、仁者はかくる行いを賞誉して天下にこれを奬励するのである。

（野村岳陽「現代語訳墨子」による）

七　荘子と列子

荘子は名を周といい、今の河南省に当たる宋の人である。ほゞ孟子と同時代であったが、孟子とは会見の機会がなかった。楚の威王が大臣にしようとしたが、荘子は笑って使者にいうには、「お祭に使う犧牲の牛は、養われている間はたいせつに取り扱われますが、いざお祭となると何よりたいせつな命を棄てなければなりません。大臣は重い役目でございますが、ちょうどこの犧牲の牛と同じようなものでございます。私はむしろ俗世間の中でのんびりとくらしとうございます。」と。この一場の説話は、よくかれの人となりを表わしている。

鵬の話は荘子の言行を記した同名の書のはじめに見える有名な話である。荘子は古來有数の文章家であって、たとえばなしを使って自分の説を述べることがうまかった。

荘子とほゞ同時代に、荘子に似た学説を持っていた列子（列禦寇）という人がいた。現存する同名の書は後人の作といわれるが、列子の学説を傳えているこの本の中にもたとえばなしが多い。

一　鵬の話

齊諧という書物には、さま〳〵の不思議なことが書いてあるが、この書物に次のような話がある。鵬が南海に飛ぼうとする時は、三千里の廣い海面に羽ばたきし、つむじ風に乗って九万里の高い空に登

り、六箇月も飛びつゞけてからはじめて休息する。ところがこの宇宙には、かげろうが立ちのぼり、ちりやあくたも乱れ飛ぶ。宇宙は実に廣大無辺で、大小あらゆるものを包含しつくしている。大空を下界から仰げばたゞ青一色に見える。これが果たして天そのものの色であろうか、それとも、そのあまりにも高く遠いためにたゞ青く見えるにすぎないのであろうか。鵬が九万里の上から見おろすと、下界はやはり青々と一様無差別に見えるであろう。さてまた水が深くないと、大きな舟を浮かべる力はない。一ぱいの杯の水をくぼ地にこぼせば、ちりやあくたは舟のように浮かぶであろう。けれどもその杯をこの水の上においたとしたら、杯は底にねばりついてしまう。それは水が浅くて舟が大きいからである。風も、厚く積みかさなっていないと、大きな翼を支える力はない。九万里も高く飛びあがって、はじめて風という風は翼に集まる。こうしてはじめてその風にのり、背に青い大空を負い、何ひとつ妨げるもののない世界を自由に南海へ飛んで行けるのである。近郊に旅するものは食事の用意も三度分で空腹を感ずることはないが、百里のかなたへ旅立つものは前夜から食糧を整え、千里を往くものは三箇月もかゝって準備をする。すべて大きなことには大きな準備が必要である。

さてこのとてつもない大げさな話を聞いた、せみと小ばととが、あざけって言った。「われ〳〵は思いきって、にれや、はぜの樹に飛びつこうとするが、なか〳〵思い通りに行かないで、地上に落ちてしまうのが関の山だ。なんで九万里も飛びあがって、南海などへ行く必要があろう。」と。また、みそさゞいも言った。「われ〳〵は、いくら高く飛びあがっても、せい〳〵数仞の高さまでで、ふだんはよもぎやぶの間を飛びまわるのが精いっぱいである。このよもぎやぶも、自分にとっては一つの世界である。一体あいつはどこへ行こうとするのか。」と。

（莊子）

二　忘れる男

宋の國にその名を華子と呼ぶ男があった。この男は五十歳ごろになって、何もかも忘れてしまうという奇病にかゝった。朝のことは夕べに忘れ、夕べのことは翌朝にはもう思い出せないという始末である。ちまたにあっては歩くのを忘れ、家にあってはすわるのを忘れた。さっきのことを今忘れ、今あったことがあとからわからなくなってしまう。そこで家の者の苦労の種となった。易者にうらなってもらっても当たらず、みこに伺いを立てて祈禱してもらってもなおらなかった。医者にもみせたが、医者は何の助けにもならなかった。ところが、魯の國にひとりの儒者があって、自分ならその病氣をなおしてみせるという話である。で、華子の家の者は、もしこの奇病を首尾よくなおしてもらえるものなら、財産を半分さしあげてもいいと言った。するとその儒者が言うには、

「この病氣はうらないや祈禱や薬などでよくなるわけのものではない。私はひとつ、この人の心をなおし、考えることを変えさせてみよう。そうすればたぶんなおるだろう。」

そこで、ためしに華子をはだかにしてみると、華子は着物がほしいと言った。それからひもじい目にあわせると、華子はたべるものをくれと言った。暗いところへほうりこむと、華子は明かるいところへ出たいと言った。儒者はよろこんで、その子に告げた。

「病氣はだいじょうぶなおせる。しかし、私の方法は一家相傳の秘法で人に知らせることができない。一週間ほど病人とふたりきりで一室にいるから、しばらくあたりの人を遠ざけていてもらいたい。」

それから、儒者が室内でどんなことをしたかいっさいわからないが、とにかく長年の病氣がたちまち忘れたようになおってしまった。

華子は正氣にかえってよろこぶかと思うと、意外にも、ひどく立腹した。かれは妻をしかりつけ、子供たちを罰し、ほこをとって儒者を家から追い拂ってしまった。この國の人々は華子に向かって、なぜそんなことをしたのかと尋ねた。すると華子は答えた。

「私がいままでなにもかも忘れていた間は、私は天地の有無を覺らなかった。今にわかに正氣にかえると、こゝ十年來の得失・哀樂・好惡がいまさらのように私の心を惱ますようになった。これから先もこの得失・哀樂・好惡が、今のようにいつまでも私の心を苦しめるのではあるまいか。ほんのしばらくでもいいから、もう一度なんとかして忘れることはできないものであろうか。」

（林語堂「支那のユーモア」吉村正一郎の訳による）

八　日本における漢文漢学

われ〳〵が日常使用する言語の中には、本來の日本語ではなく、漢語にもとづいたものがたくさんある。この漢語の使用は明治・大正時代の文章になると今よりもずっと多い。それのみか、そのころまでは、漢字ばかりを並べた文章も少なからず行われたのである。その漢字のみの文章には、純粹の支那の文章に近いものもあるが、一方、中華民國人には意味のわからぬものもある。それは、日本語を漢字をかりてうつしたものがその中にあるからである。今、いにしえにさかのぼって漢字や漢文をわれ〳〵の祖先が、いかに学び、いかに使用したか、また支那についての学問、すなわち漢学が、どう発達して來たかをしらべてみよう。

あなたがたはすでに浦島太郎の傳説を詠んだことと思う。あの歌は、万葉集では、かな交りの文ではなくて、

春日之霞時爾墨吉之岸爾出居而釣舟之得乎良布見者古之事曾所念水江之浦島兒之堅魚釣鯛釣矜及七日家爾毛不來而海界乎過而榜行爾海若神之女爾…

というように記されていたのを、後の人が読みこなして、かな交りに書きなおしたのである。漢文を習ったことのない人は、漢字ばかりで書かれているから、これが漢文だと思うかも知れないが、そうではない。「春日」とか、「及七日」とか、「海若」とかいう文字は、なるほど漢字の意味をとった語句である。しかし、「得乎良布」とか、「爾毛」とか、「乎」とかいう類は、すべて、わが國語を、漢字の音を借りてうつしたにすぎない。なぜ、かな文字で書かれなかったかというと、当時、わが國には文字がなかった。かな文字は、もっと後になって、漢字から作り出されたものである。

そうなるとあなたがたは、漢字はいつごろ傳わって來たのか、どういうふうにして、その漢字を借

りて日本語をうつすようになったかという疑問をいだくであろう。

古史の傳えるところによると、應神天皇の時に、朝鮮半島から王仁という人が、わが國に漢籍を傳えたという。そのころ、文字がなかったわが國では、知識階級の人々が、きそって支那の文章を習った。その後佛教が輸入されて、次第にわが國に流行して來たが、その經文も支那の文章でつゞられていた。

われ〳〵の祖先は、はじめはその支那文を、朝鮮人の傳えた支那の発音をまねて読んでいたに違いない。そしてそれにまねてみずから作ったりしていた。しかし、やがて、その支那文を日本流に読みこなす方法を考え出して、いわゆる訓読をするようになり、漢文という名称も起って來た。また、漢字の意味や発音をかりて、自分たちの言語や思想を表わすようになった。この浦島の長歌は、かようにしてできたものである。

そも〳〵、わが國が、古くから公私の交通をしていた國は、支那大陸と朝鮮とであった。大陸との國交が始まったのは推古天皇の時で、その後、國使に随行した留学生や留学僧が帰って來た時に、かの國の制度や学藝をもたらした。大化の改新の実行にはかれらの力が大きかったのである。

藤原・奈良二京の時代の制度は唐制の模倣であるといってもよい。律令や学制の内容は唐制に近い。学問文章とともに、支那の思想も早くから輸入されて、種々の書物も作られた。古くから傳承された神話傳説に史実を加えて、古事記[1]・日本書紀[2]などが作られ、諸國の風土記[3]が編まれた。和歌を集めた万葉集[4]、漢詩をまとめた懐風藻[5]などが作られたのも奈良時代であった。これらの書物はみな漢字のみでつゞられたわが上代の代表的著作であるが、その中には純粋の漢文に近いものもあれば、日本語を漢字をかりてうつしたものもあり、また両者の混淆したものもある。

平安朝においても、大陸文化の影響は著しかった。平安朝の知識階級は、六朝[6]や隋唐の詩文を学び好んでこれを愛誦したり、あるいはみずからまねて作ったりした。漢字からかな文字が作り出されて、かな交りの國文が成立してからも、その内容には支那の思想や文学の影響がいちじるしいばかりでなく、公用の文章にはなお主として漢文が使われた。

ひとり公用の文章ばかりではなく、記録や日記の文章も純粋な漢文ではないが、漢文体に近い形のものであった。書簡文においては、候文というものができ、近年まで廣く使われた。「被遊度」「相違無之」「奉存」「不堪」「如此御座候」などと、漢文めいて、文字が顚倒しているものを、世間では不自然とも思わずに使っていたのである。これらは、全く漢文普及の影響である。

それのみではない。源平盛衰記・平家物語・太平記などの軍記物[7]には、漢文の口調や故事が非常に多い。佛教[8]の説話を記した書物にも、印度や支那の故事傳説が多くはいっている。これらの書物が作られたころには、大陸との公の交通はすでに中絶していたが、かの國の文物はもっぱら僧侶によって輸入された。

鎌倉・室町時代の学藝は、おもに公家と僧侶とによって維持された。漢唐の儒学は公家の中に秘傳として残り、宋元の文化は僧侶の間に行われた。ことに京都の五山を中心とする禪宗は、盛んに詩文を作り、また漢籍の口語訳をも試みた。いわゆる五山文学は全く漢文学にほかならない。もっとも武家の中にも、まれには漢籍を集めたり、学問をすゝめたりした人がある。北條氏の金沢文庫[9]、上杉氏の足利学校[10]の藏書は古今に知られている。

徳川家康は儒教によって世の中を治めてゆく方針を立てた。江戸時代に儒学が興隆した一因はこゝにあったが、儒学は地方にも盛んに行われて、学問といえば漢学をさすのが常であった。林羅山[11]は家康に仕え、その子孫は代々幕府の儒官となり、多くの儒者が諸侯に仕え、幕府には昌平坂学問所、各藩には藩学がおかれ、朱子学が中心となった。本郷の湯島をはじめ、諸國に孔子廟が建てられた。

江戸時代に大陸との交通の任に当たっていたものは多くは彼我の商人で、新しい書物も学問も続々輸入され、明の遺儒の渡來もわが文化の興隆にあずかって力があった。かくて学問は上下に普及し、文運は四方に発展した。中江藤樹[12]は朱子学から陽明学に轉じ、実践を訓え、近江聖人の尊称を得、熊沢蕃山[13]はその門に出て、池田侯に仕えて政治的手腕をもって知られた。京都では伊藤仁斎[14]・東涯[15]の父子が知られ、江戸では荻生徂徠[16]・太宰春台[17]の師弟が聞えたが、そのほか、名を後世に傳えた大儒はいちいち枚挙にたえない。山崎闇斎[18]は國学と結びつけ、貝原益軒[19]は儒教をもとにして、かな交りの教訓書を作った。寺院における平民教育はます〳〵盛んとなり、いわゆる寺子屋が津々浦々に設けられたが、卑近な読み書きそろばんのほか、経書の素読が廣く行われた。

漢詩漢文を作る風はひとり僧侶のみならず、一般人の間にもひろがった。漢文が朗読され、漢詩が吟詠され、この風は明治・大正年間にまで及んだ。儀式ばった文章は漢文口調でつゞられることが常法であり、碑文などは漢文体であることがほとんど常識であったのみならず、一般の文章にも漢文口調は多く、欧文の訳語には好んで漢語が用いられ、漢文の故事成語は日常の新聞紙・会話に常に使用された。その風は近ごろになってようやく衰えたが、矛盾[20]とか、蛇足[21]とかいう日常使うことばの出典は漢籍にあり、「杜撰[22]」とか、「井の中のかわず[23]」とか、「五里霧中[24]」とかいうことばも、もとは漢文から出たものである。

漢文がわが文化に影響した点は実に多く、ギリシア・ローマの古典が欧米の文化に及ぼした影響とは同日の談でない。

注

(1) 元明天皇が天武天皇の御遺志を継がれて、太安萬侶に命じて作らせられたもの。三卷。内容は推古天皇の時まで、文体は國語が多い。

(2) 舍人親王・太安萬侶等が元正天皇の勅を奉じて編んだ書。三十卷。内容は持統天皇までで、文体は漢文に近い。

(3) 元明天皇の時、諸國に命じて、その山川・地味・産物・傳説を書き記して差し出させられた。かくてできあがったものであるが、今日一國の全部または大部分を存するものは、常陸・出雲・播磨・肥前・豊後の五部のみで、そのほかは、他書に引用された断片を集めたものである。文体はやはり、國語を漢字の音訓をかりて記している。

(4) 奈良時代までの和歌を集めた書。今本は二十卷。編者未詳。原文は漢字のみでつゞられた。

(5) 邦人の作った漢文を選んだ書。編者未詳。

(6) もと、今日の南京に都した呉・東晋・宋・齊・梁・陳の六代をいうが、文学史上では、ぼんやりと、後漢末から隋代までの間をさす。

(7) 軍記物語・戰記物語などともいう。

(8) 平安朝のものでは今昔物語、鎌倉時代のものでは続古事談・十訓抄など。

(9) 遺跡は横浜市磯子区称名寺の境内。
(10) 遺跡に近く足利学校遺蹟図書館がある。金沢文庫の藏書の大部分が散佚しているのに対し、学校の藏書は大半こゝに現存している。
(11) 名は信勝、また道春・羅山子・羅浮山人等の号がある。京都の人。明暦三年沒、年七十五。鵞峰（恕、春勝）はその子。
(12) 名は原、近江の人、慶安元年沒、年四十一。
(13) 名は伯継、京都の人。元祿四年沒、年七十三。
(14) 名は維楨。書斎を古義堂という。宝永二年沒、年七十九。
(15) 名は長胤、仁斎の長男。元文元年沒、年六十七。
(16) 名は雙松、字は茂卿、柳沢侯の儒。享保十三年沒、年六十三。
(17) 名は純、信濃の人、延享四年沒、年六十八。
(18) 名は嘉、字は敬義、京都の人。天保二年沒、年六十五。
(19) 名は篤信、筑前の人、正徳四年沒、年八十五。
(20)(21) 韓非子・戰國策から出た。
(22) 杜默という人の詩がリズムに合っていないのが多いので、詩文や著書をいいかげんに作って、誤りの多いたとえ、轉じて粗漏のこと。宋の王楙の野客叢書に見える。
(23) 見識のせまいたとえ。莊子に出ている語。
(24) 後漢書張覇傳に附錄された張揩の故事。

九　詩　五首

第一首はわが國で特に有名な唐詩である。この詩にあこがれてこの寺を訪れる人は多い。第二首は漢唐の時代には西域との交通路に当たっていた沙州（今の甘肅省敦煌縣）のあたりの砂漠中の、人家の絶えたところを通過する旅人のさびしいこゝちをよく表わしている。作者はかゝる國境の地のありさまを体驗によって歌った詩人として有名である。第三首は春の夜の樂しいさま、古來傳誦された詩である。第四首はおもむきをかえて專門の文人でない学者の作品を錄したが、この詩は、王陽明が龍城の駅丞に左遷されて、赴任の途中、山野の中の一寺に宿し、俗界を離れようとする念を起したところ、一異人に戒められ、翻然悟って壁間に題した一首と傳えられる。哲人のわだかまりのない、胸襟の開けたさまを味わうに足りる。第五首は安祿山の乱にあたり、杜甫は避難の途中、賊に捕らえられた。その至德二年の春の作という。國破れてとか、故郷からの書信が絶えたとかいうのはこれがためである。

(1) 楓橋の夜泊

月落ち　からすないて　霜天に　満つ

江楓 漁火 愁眠に 対す
姑蘇(2)城外 寒山寺
夜半の 鐘声 客船に 到る　　(張継)(3)

積(せき)中の作

うまを 走らせて 西來 天に 到らんと 欲す
家を 辞して 月の 両回 まどかなるを 見る
今夜は 知らず いづれの 処にか 宿せん
平沙(いさ) 万里 人煙を 絶つ　　(岑参)(4)(しんしん)

春夜

春宵(しょう) 一刻 あたひ 千金
花には 清香 有り 月には 陰 有り
歌管(5)(しゅかん) 楼台 声 寂々
鞦韆(6)(しゅうせん) 院落 夜 沈々　　(蘇軾)(7)(そしょく)

海にうかぶ

険夷(8)(けんい) もと 胸中に とゞこほらず
なんぞ 異ならん 浮雲の 太空を 過ぐるに
夜は 静かなり 海濤(たう) 三万里
月明 錫(9)(しゃく)を 飛ばして 天風に くだる　　(王守仁)

春望

國 破れて 山河 あり
城 春にして 草木 深し
時に 感じては 花にも 涙を そゝぎ
別れを 恨んでは 鳥にも 心を 驚かす
烽火(ほう) 三月に つらなり
家書 万金に あたる
白頭 掻けば 更に 短く
すべて 簪(しん)に たへざらんと 欲す　　(杜甫)

注

(1) 江蘇省蘇州の西方にある。
(2) 今の江蘇省蘇州。寒山寺はその西郊にある。
(3) 唐の中ごろの詩人。
(4) 唐の中ごろの詩人、高適と名をひとしくした。
(5) ぶらんこ。ぶらんこは古くから支那にあった。
(6) 邸内の中庭。
(7) 北宋時代の文章家。室を東坡に築いていたので東坡居士と号した。
(8) 逆境と順境。
(9) 僧侶や道士などの用いるつえで、それらの人が巡遊するのをいう。

○月落烏啼霜満天。江楓漁火対愁眠。姑蘇城外寒山寺。夜半鐘声到客船。
○走馬西来欲到天。辞家見月両回円。今夜不知何処宿。平沙万里絶人煙。
○春宵一刻直千金。花有清香月有陰。歌管楼台声寂々。鞦韆院落夜沈々。
○険夷原不滞胸中。何異浮雲過太空。夜静海濤三万里。月明飛錫下天風。
○國破山河在。城春草木深。感時花濺涙。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵万金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。

十古都三景

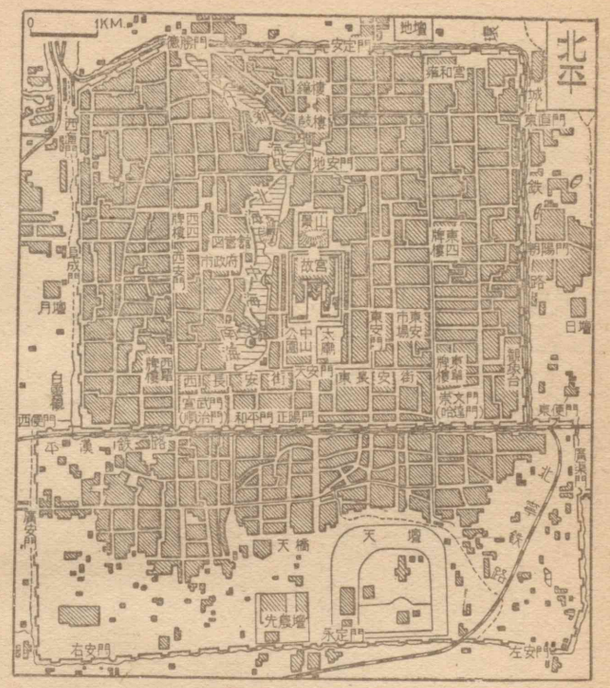
歴史の古いことと土地の廣いこととは、中華民國を理解する上にきわめて重要な要素である。こゝに時代と場所とから見て、最も代表的な古くからの都の様相を先輩の作品にもとづいてしのぶこととする。たゞし、かなり改めたとはいえ、原作は、明治の末年ごろの紀行文であるから、現状とは多少の隔たりがあるが、かえって昔の面影を残しているところを知ることもできる。

北京

南北風氣の差が少なくないから、河北と江南とはとうてい同日に論ずることはできない。しかし、北京は、ある程度支那の模型ということができるから、北京を了解すれば支那の過半を了解したといえる。

北京は順天府また燕京ともいう。愛親覚羅氏が満洲から起り、明を滅ぼしてついに支那に君臨するや、明朝の旧に拠ってこゝに都したのである。明は元の大都に拠って、やゝ改修を加えたもの、そしてこゝに帝都を置いたのは実に遼朝をもってはじめとする。

今の北京城は内城・外城の二つに分かれている。そして内外ともに堅固な城壁をめぐらし、四方各所に出入の門がある。内城壁の高さは約三丈五尺、基礎の処で厚さ六丈余り、頂上で五丈余りある。南方



正面に正陽門があり、俗に前門という。

外城は内城におくれること百数十年、嘉靖年間に築造されたものである。最初は北京の四面を包む予定であったが、その経費の大なるがために、わずかに内城の南面のみを包むにとどめた。城壁の高さおよび厚さは、やゝ内城に劣っている。

北京に遊ぶ者は、必ずまず城壁に登る。そして一度はこの城壁の壮大な、真に金城鉄壁のおもむきがあるのに驚く。さて、この城壁上からは最もよく北京の大観を両眼の中に收めることができる。内城の中央、正陽門に接して立ちつらなった大厦、黄色の屋瓦の著しく人目をひくのは紫禁城である。左右相称の雄大な構図に並ぶ建物が夕日にはえる壮観は世界の建築美の中でもけだしその比きわめてまれなるものであろう。皇居の正北にある小丘は景山という。この小丘はいったん緩急あるとき、取って燃料とするために石炭を積んで成したものであるという言い傳えから、俗にこれを煤山と称する。煤とは石炭のことである。明末李自成の乱の時、荘烈帝が自経して悲惨な最後をとげた遺跡である。鼓楼および鐘楼はその北に立っているが、その西には宮城の外苑である北海に白塔がそびえ、中南海が、その南に続いて実に美しい森の都をかたちづくっている。更にはるかに南方を見ると外城の南端に紫のかわらを望む。即ち天壇祈年殿である。毎年天子が冬至に天を祭りまた新年に五穀の豊穣を祈るところである。仰げば西天に一帶の連山を見る。いわゆる大行山である。この山は遠く河内に起り、直隷・山西の境を画して北京の西を走り、北の方居庸関から碣石につらなって、北京の西北二面の守りをなしている。この山を見、またはるかに天につらなる河北の大平原を望むと実に雄大な感じに打たれるのである。

長安

関中はいわゆる金城千里天府の國である。成周こゝに都すること四百年、天下周を宗とした。秦がこの地に拠るや、六國は命をうけ、ついに統一せられた。漢・苻秦・姚秦・後周・隋・唐、みなこゝに都して天下を制御したのである。故に関中の一草一木でもことゴ〳〵くいにしえを語らざるはない。

今の西安府城は、漢都の南十数里にある。隋の開皇二年はじめてこれを営み、唐はその旧に拠った。南門の外、城郭に近いのを小雁塔といい、遠く八里の外、樂遊原中に在るのを大雁塔という。大雁塔は即ち有名な慈恩寺塔である。慈恩寺は、唐の高宗が文徳皇后の福利のために建てたものである。

寺の南に小石橋あり、そのかたわらにわずかに水をたゝえた小池がある。周囲およそ十余間、これが曲江である。江辺には紫雲楼あり、芙容苑あり、杏園および慈恩寺あり、細柳新蒲絵のごとく、都人遊賞の地で、三月三日には最も混雑を極めた。玄宗は後進の登第する者に宴を賜い、宴やんで後、

進士はあいひきいて慈恩寺に遊び、名を雁塔に題した。後、安祿山の乱に際し、杜甫が、哀江頭の詩に、

少陵の野老声をのんで哭す　春日潛行す曲江の曲
江頭の宮殿千門をとざす　細柳新蒲たがために緑なる

と詠じたのは卽ちこゝである。

雁塔は四面七層高さ三百余丈ある。一層は一層より高く、眼界もまたいよ〳〵大となる。欄によって仰いで南山に対し、ふして樂遊。白鹿の諸原を見おろす。しかし昔日の壯観は今また見ることができない。おりから、日はようやく傾き、暮色が西より來たって関中に満ちた。卽ち荆叔の詩を高唱した。

漢國山河あり
秦陵草樹深し
暮雲千里の色
処として心を傷ましめざるはなし

南京

唐の杜牧は、かつて秦淮に泊して、

商女は知らず亡國のうらみを　江を隔てなほ唱ふ後庭花

と歌った。河はせまいが、両岸には今も茶楼があい並び、画舫が江を圧している。橋上に立って秦淮に臨めば、なお杜牧の詩を唱して、六朝興廃の夢の跡を追憶せざるをえない。

秦淮より轉じて、城南聚宝門を出で、行くこと一清里ばかりで雨花台にいたる。雨花台は聚宝山の最高峰である。梁の武帝の時代に、僧雲光が経を台上に講じた時、天地が感動して花を降らしたからこの名がある。俗にその花が凝って石となり、今も台上から出ると傳えている。そのいわゆる雨花石というものを拾ってみると、めのうの小塊である。山中から、めのうが出るので聚宝山ともいい、雨花の奇蹟ともいい傳えられたものであろう。台上に立てば南京城は眼下にあって一一指摘することができる。長髪賊が南京を根拠としていた時、曾國筌は湘勇をひきいて雨花台に拠ってこれを攻め、ついに南京を陥れたというのは、もっともと思われる。雨花台のふもとを梅岡という。府志に晉の謝安の墓は梅岡にあると見えているけれども、今また尋ねる由もない。

聚宝門に入り、城壁に沿って西に行くと、城の西南隅に鳳凰台の遺跡がある。宋の元嘉十四年のある日のこと、ふだん見なれない二羽の鳥が、この台上に飛んで來た。その美しさは目もさめるばかりであったので、時の人はこれを鳳凰と言った。それでこの台に名づけたと言ひ傳えられている。李白

の「[12]金陵の鳳凰台に登る」の詩は、人口に膾炙(かいしゃ)しているものである。台のあたりは地勢が隆起して、小丘のようである。当年の楼閣は荒廃することすでに久しく、遺物の見るべきものはないけれども、遺跡のあたりに寺がある。この日は煙霧淡く江村にたちこめ、加えて金陵の城壁が高くそびえているので、李白が詠じたごとき「三山半ば落つ青天の外、一水中分す白鷺州。」の光景は見ることができなかった。

鼓楼は南京城の中央にある。長髪賊の乱に兵火にかゝってから、市街は南方にのみあって、ついに復旧せず、楼は今市街の北端にある。楼にのぼれば南京の形勢は歴々として眼前にある。東は北極閣の上、はるかに秀麗なる紫金山に対し、南は市街のいらかの波のごときを見、煙霧の間はるかに南門を望む。西は小丘起伏して石頭山につらなり、北は大江を控え、はるかに獅子山の砲台を望む。その地勢の雄大なる、眞に帝王の居たるに足るものがある。[13]孫吳がはじめて京口からこゝにうつって以來、東晋南朝歴代の都した所であって、明初にこゝに都して城郭を大きくし、周囲九十余清里に及ぶという。北京の雄大なのも、その城壁は内外合わせて六十清里にすぎないから、南京の規模の雄大なことは、これによっても知ることができる。

注

(1) みずから首をくゝって死ぬこと。
(2) 官吏登用試験に及第すること。
(3) 少陵野老呑聲哭。春日潛行曲江曲。江頭宮殿鎖千門。細柳新蒲爲誰綠。(下略)
(4) 唐の人か、傳記未詳。
(5) 漢國山河在。秦陵草樹深。暮雲千里色。無處不傷心。
(6) 南京の東南から城内を貫ぬく川の名。秦の始皇帝が鍾山をきり開いて淮河を注ぎこんだというのでこの名がある。
(7) 煙籠寒水月籠沙。夜泊秦淮近酒家。商女不知亡國恨。隔江猶唱後庭花。
(8) 陳の後主が宴遊にふけっていた時、玉樹後庭花という曲を作った。その亡國の哀調をさす。
(9) 曾國藩の弟で、長髪賊の乱の平定に功があった。
(10) 曾國藩が募集した湖南の義勇軍。
(11) 晋(しん)の武將、前秦の兵を伐って功を立てた。
(12) 鳳凰台上鳳凰遊。鳳去台空江自流。吳宮花草埋幽徑。晋代衣冠成古丘。三山半落青天外。一水中分白鷺州。總爲浮雲能蔽日。長安不見使人愁。
(13) 三國の吳は孫氏であることから孫吳という。
(14) 吳の孫権は江蘇の丹徒にうつり、後、建業に都して、こゝに京口縣をおいた。今鎮江縣の役所があるところ。

十一　雙十節(そうじゅうせつ)の由來

雙十節は、中華民國建國の記念日である。革命当時の内外の諸情勢を回顧して、その歴史

的意義を理解しようとするものである。

十月十日は、中華民國では雙十節と呼んで、建國記念の祝日である。それは、清朝の宣統三年陰暦八月十九日滅満興漢を旗じるしとした辛亥革命ののろしが武漢の地にあがった日であって、これを太陽暦に換算すると十月十日に当たるからである。

今、試みに、あへん戰爭以後の清國の対外関係を一見すると、道光二十二年、南京條約の締結によって、廣東・福州・厦門・寧波・上海の五港が開かれ、咸豊七年にはロシア・アメリカ・イギリス・フランス諸國と天津條約を結んで、天津・上海・漢口の租界が設けられ、同治四年には香港上海銀行が、英國によって設立せられた。かゝる中に、朝鮮問題を契機として日清両國は戰端を開くにいたり、更にドイツは膠州湾青島を、ロシアは旅順・大連を租借し、光緒二十五年には義和團(1)即ち拳匪の乱があり、同三十、三十一年には、日露戰爭が満洲の野において行われ、清末の対外関係は、実に騒然たるものであった。

ひるがえって、当時の清國の政治社會情勢を考えてみると、道光二十六年、日でり、風水害等によるみぞうの大饑饉が襲來し、翌年には、湖南・江西・廣東等に白蓮教(2)徒の騒乱があり、その後、咸豊元年には、有名な洪秀全が、廣西の永安に太平天國を樹立し、武昌・九江・安慶・南京・上海に勢力を拡張して更に天津・北京へも迫った。その呼号した、天朝田畝制度は実際にはほとんど行われなかったけれども、それは土地の私有を排して公有となし、十六歳以上の男女には一律に土地を分けて耕さしめようという主張である。清廷の支配階級はついにこれを鎮圧したけれども、太平天國は、その

國を保つこと実に十有五年の久しきにわたったのであった。かくて、年若き光緒帝の信任をえた康有爲は、政治制度の改革など各種の國民的革新を行おうと主張したが、頑迷な西太后・袁世凱一派の反対にあってたちまち失敗し、人々はこれを戊戌(3)政変と言った。

そのころ澳門の医師をしていた孫文は、立憲政治を主張する興中会をその地に設立してこれが牛耳を執り、また明治三十六年即ち光緒二十九年、日本の留学から帰った黄興は、張継・宋教仁・馬福益らとともに華興会を組織して長沙に挙兵を企てたが成らず、直ちに日本に亡命した。明治三十八年八月、孫文は興中会・華興会と、蔡元培・章炳麟らの作っていた光復会とを、すべて合併して、中國革命同盟会を組織した。これは、普通に中國同盟会と略称し、実に民國革命の母体をなしたものである。この時、加盟する者四百、その主張は、多く章炳麟・汪兆銘・胡漢民らによって堂々の論陣が張られ、共和政府の樹立、世界平和の維持、土地の國有、日華両國の提携等が、その綱領であった。

かゝる内外情勢の中にあって、宣統三年八月ついに武漢の地に革命ののろしがあがり、十一月末までには湖南・安徽・廣西・廣東・貴州・江西・山東・湖北・福建・陝西十余省ことゞく独立を叫び、武昌に中華民國臨時政府は樹立され、この時、外遊から帰った孫文は臨時大総統に推された。これが陰暦十一月十三日、陽暦の一月一日であって、これを黄帝紀元四千六百九年、中華民國元年元旦と定めた。よってこれから逆算して、武漢起義の八月十九日は、太陽暦の十月十日に当たるので、これを國慶日(4)雙十節として記念したのである。

注

(1) 清の時の宗教的祕密結社で、拳法棒術を習って呪文を唱えると弾丸を避けることができると迷信して天津で事を起し、当時の直隷・山東・山西の各地で教会や鉄道を破壊した。これを平定するために、八箇國の連合軍は天津・北京を攻略したが、わが國ではこれを北清事変と呼んだ。

(2) 佛教の白蓮宗から出て、元代に盛んで明清にかけて傳わった宗教的祕密結社で、義和團などもその支派である。

(3) 西太后を擁して守旧派が譚嗣同らの革新派を倒したのが、戊戌即ち光緒二十四年の八月であった。

(4) 式典などに歌う中華民國國歌に暫定されている國民党党歌は左の通りである。

三民主義、吾党所宗。以建民國、以進大同。咨爾多士、爲民前鋒。夙夜匪懈、主義是從。矢勤矢勇、必信必忠。一心一德、貫徹始終。

三民主義は、わが党の宗とするところ。もつて民國を建て、もつて大同に進む。咨爾多士、民の前鋒たり。夙夜懈らず、主義これ從ふ。矢つて勤め矢つて勇み、必ず信必ず忠。一心一德、貫徹始終せん。

十二　孟子とその主張

一

鄒の孟軻の母、その舍、墓に近し。孟子をさなきとき、嬉遊するに墓間の事をなす。孟母いはく、「これわが子を居処するゆゑんにあらざるなり。」と。すなはち去りて市のかたはらに舍す。その嬉戯はすなはち賈人衒賣の事なり。また曰はく、「これわが子を居処するゆゑんにあらざるなり。」と。またたうつりて学宮のかたはらに舍す。その嬉戯は、すなはち俎豆を設け、揖讓進退す。孟母いはく、「眞にもつてわが子ををらしむべし。」と。つひにをる。孟子すでに学びて帰るに及び、孟母、学のいたるところを問ふ。孟子いはく、「自若たり。」と。孟母刀をもつてその織を断ちていはく、「子の学を廃するは、わがこの織を断つがごとし。」と。孟子おそれ、旦夕勤学してやまず、子思に師事し、つひに名儒となる。君子いふ、「孟母、人の母たるの道を知る。」と。

（李瀚「蒙求」）

二

○孟子いはく、人みな、人に忍びざるの心あり。人みな人に忍びざるの心ありといふゆゑんのものは、今、人たちまち孺子のまさに井に入らんとするを見れば、みな怵惕惻隱の心あらん。交はりを孺子の父母にいるるゆゑんにあらざるなり。誉を郷党朋友にもとむるゆゑんにあらざるなり。その声をにくんでしかるにあらざるなり。これによつてこれを観れば、惻隱の心なきは人にあらざるなり。羞惡

の心なきは人にあらざるなり。[11]辞讓の心なきは人にあらざるなり。是非の心なきは人にあらざるなり。

惻隱の心は仁の端[12]なり。羞惡の心は義の端なり。辞讓の心は礼の端なり。是非の心は智の端なり。人のこの四端あるは、なほその四体あるがごときなり。この四端ありて、みづからあたはずといふ者は、みづから賊する者なり。

○孟子いはく、みづから暴[13]する者は、ともに言ふあるべからざるなり。みづから棄つる者は、ともになすあるべからざるなり。言、礼義にあらざる、これを自暴といふ。わが身、仁にをり義によることあたはざる、これを自棄といふ。仁は人の安宅[14]なり。義は人の正路なり。安宅をむなしうしてをらず、正路を舍ててよらず、かなしいかな。

○孟子いはく、人に存するもの、眸[15]子より良きはなし。眸子はその惡をおほふことあたはず。胸中正しければすなはち眸子あきらかなり。胸中正しからざればすなはち眸子くらし。その言を聽き、その眸子を観れば、人いづくんぞかくさんや。

○孟子いはく、牛山[16]の木かつて美なり。その大國に郊たるをもつて、斧斤これを伐る。もつて美となすべけんや。これその日夜の息するところ、雨露のうるほすところ、萌蘖[17]の生なきにあらず。牛羊またしたがつてこれを牧す。こゝをもつてかのごとく濯々[18]たるなり。人その濯々たるを見るや、もつていまだかつて材あらずとなす。これあに山の性ならんや。人に存するものといへども、あに仁義の心なからんや。それその良心をほしいまゝにするゆゑんのものも、またなほ斧斤の木におけるがごときなり。旦々にしてこれを伐る、もつて美となすべけんや。

○孟子いはく、仁は人の心なり。義は人の路なり。その路をすててよらず、その心をほしいまゝにし

て求むるを知らず。かなしいかな。人、雞犬の放たるるあれば、すなはちこれを求むるを知る。心をほしいまゝにするありて求むるを知らず。学問の道は他なし。その放心(19)を求むるのみ。

○孟子いはく、今、無名の指、屈してのびざるあり。疾痛事に害あるにあらざるなり。もしよくこれをのぶる者あらば、すなはち秦楚(しんそ)の路を遠しとせず。指の人にしかざるがためなり。指、人にしかざれば、すなはちこれを惡むを知る。心、人にしかざれば、すなはち惡むを知らず。これこれを類を知らずといふ。

注

(1) たのしみあそぶこと。
(2) あきないをする人。
(3) あいきょうをふりまいて賣る。
(4) 祭のとき食物をのせる器。
(5) 手をこまぬいてうや〳〵しく礼をすること。
(6) 幼兒。
(7) はっといたましく感じ、驚き恐れること。
(8) 深くあわれみ痛むこと。
(9) 評判、幼兒を見殺しにした惡い名。
(10) 自分の不善を恥じ、人の不善をにくむこと。
(11) ひかえめにする。
(12) いとぐち。
(13) きずつける。
(14) 身をおくのに安全で心配のない所。
(15) ひとみ。
(16) 齊(せい)の都の東南にある山、今の臨淄(し)縣の南十支里にある山。
(17) めばえとひこばえ。
(18) つや〳〵してかゞやくさま。
(19) 失った良心。

○孟子曰。人皆有二不レ忍レ人之心一。所二以謂一人皆有二不レ忍レ人之心一者。今人乍見二孺子將レ入二於井一。皆有二怵惕惻隱之心一。非レ所二以內一交於孺子之父母一也。非レ所二以要一譽於鄉党朋友一也。非下惡二其声一而然上也。由レ是觀レ之。無二惻隱之心一非レ人也。無二羞惡之心一非レ人也。無二辞讓之心一非レ人也。無二是非之心一非レ人也。惻隱之心仁之端也。羞惡之心義之端也。辞讓之心礼之端也。是非之心智之端也。人之有二是四端一也。猶二其有二四

体一也。有二是四端一而自謂レ不レ能者。自賊者也。（公孫丑上）

○孟子曰。自暴者。不レ可二與有レ言也。自棄者。不レ可二與有レ爲也。言非二礼義一。謂二之自暴一也。吾身不レ能二居レ仁由レ義。謂二之自棄一也。仁人之安宅也。義人之正路也。曠二安宅一而不レ居。舍二正路一而不レ由。哀哉。（離婁上）

○孟子曰。存二乎人一者。莫レ良二於眸子一。眸子不レ能レ掩二其惡一。胸中正。則眸子瞭焉。胸中不レ正。則眸子眊焉。聽二其言一也。觀二其眸子一。人焉廋哉。（離婁上）

○孟子曰。牛山之木嘗美矣。以二其郊一於大國一也。斧斤伐レ之。可二以爲レ美乎。是其日夜之所レ息。雨露之所レ潤。非レ無二萌蘖之生一焉。牛羊又從而牧レ之。是以若レ彼濯濯也。人見二其濯濯一也。以爲レ未二嘗有レ材焉。此豈山之性也哉。雖レ存二乎人一者。豈無二仁義之心一哉。其所二以放一其良心一者。亦猶二斧斤之於レ木也。旦旦而伐レ之。可二以爲レ美乎。（告子上）

○孟子曰。仁人心也。義人路也。舍二其路一而弗レ由。放二其心一而不レ知レ求。哀哉。人有二雞犬放一則知レ求レ之。有レ放レ心而不レ知レ求。学問之道無レ他。求二其放心一而已矣。（告子上）

○孟子曰。今有二無名之指屈而不レ信。非二疾痛害レ事也。如有二能信レ之者一。則不レ遠二秦楚之路一。爲二指之不レ若レ人也。指不レ若レ人則知レ惡レ之。心不レ若レ人則不レ知レ惡。此之謂レ不レ知レ類也。（告子上）

中等國語
三
（4）

昭和二十二年六月三十日印刷　同日飜刻印刷
昭和二十二年七月四日発行　同日飜刻発行
昭和二十三年三月一日修正印刷　同日修正飜刻印刷
昭和二十三年三月五日修正発行　同日修正飜刻発行
（昭和二十三年三月五日　文部省検査済）

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Mar. 1, 1948)

著作権所有
著作兼発行者　文部省

東京都千代田区神田岩本町三番地
飜刻
発行者　中等學校教科書株式會社
代表者　阿部眞之助

東京都千代田区神田神保町三丁目九番地
印刷者　明和印刷株式會社
代表者　小河幸三郎

発行所　東京都千代田区神田岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

廣島大学附属中学校
P.T.A.
図書館
種類 番号
昭和 年 月 日受入

広島大学図書
01 0130449849